「通訳案内士のための神道」
～神職である通訳案内士が伝えたい日本人のこころ～

2017 年 6 月 20 日（火）（一社）日本観光通訳協会(JGA)
第一支部研修終了レポート

6 月 20 日（木曜日）13:30～16:45、東京ウイメンズプラザ　1F　視聴覚室において、JGA 主催 第一支部研修「通訳案内士のための神道」が開催されました。

昨年 11 月に続き 2 回目の実施でしたが、総勢 44 名（JGA 会員 42 名、非会員 1 名、運営委員 1 名）が、首都圏のみならず、愛知県、宮城県や高知県からも参加し、通訳案内士の神道への関心の高さが感じられました。

講師は英語の通訳案内士、JGA 正会員にして神職の安孫子英智氏です。

第一部は「神道とは」「日本人の生活習慣、精神文化に生きる神道」「罪穢れ、禊祓の思想」のテーマで、縄文時代からの神道の成り立ちや神を祀る場所や神が降りる依代、日本人が特に宗教とは意識せずに実践している習慣や伝統にみられる神道の哲学や教えなどを学びました。日本が国家として発展してくるのにつれて神道もまたその系統や祭祀が整い、権威を伴ってくることなど、天皇との関係にも触れながらわかりやすく説明されました。また、神職になるためのご自身の修業のご経験から、食事、さらに祭祀の作法、直会（なおらい）へと話は広がります。

最初は白い着物に浅黄色の袴姿だった安孫子講師ですが、休憩時間後の第二部では、より正式な狩衣の装束姿で現れました。神職の位により、装束の色や柄が異なるとのこと。

今も昔からの神事が行われている例として紹介された奥能登の「あえのこと」は実に興味深い。

一柱の神にも「和魂（にぎみたま）」と「荒魂（あらみたま）」があり、「中今（なかいま）」つまり「まさに今」が大切という神道の世界観は実に現実的です。「雅楽と神道」のテーマに入ったところで、安孫子講師が笙（しょう）と篳篥（ひちりき）の演奏を披露。「天から差し込む光」にたとえられる笙の音の神々しさ、「地を行く人の声」にたとえられる篳篥の何とも言えぬ響きに、会場は静まりかえり、しばしのち盛んな拍手が沸き起こりました。

その後、社殿建築や鳥居の様式、主な神の名前とその神格・神徳と祀られる神社、さらに祝詞と言霊など、ガイドにとって大切な事項の説明に続き、予め寄せられていた質問への回答をいただいたところで、残念ながら時間切れとなりました。

日本文化の根底をなす神道の世界を学ぶには、とても 3 時間の研修では足りないことがよくわかりました。参加者からはさらに深い話を聞きたい、との声もあり、今後、さらなる企画が必要そうです。